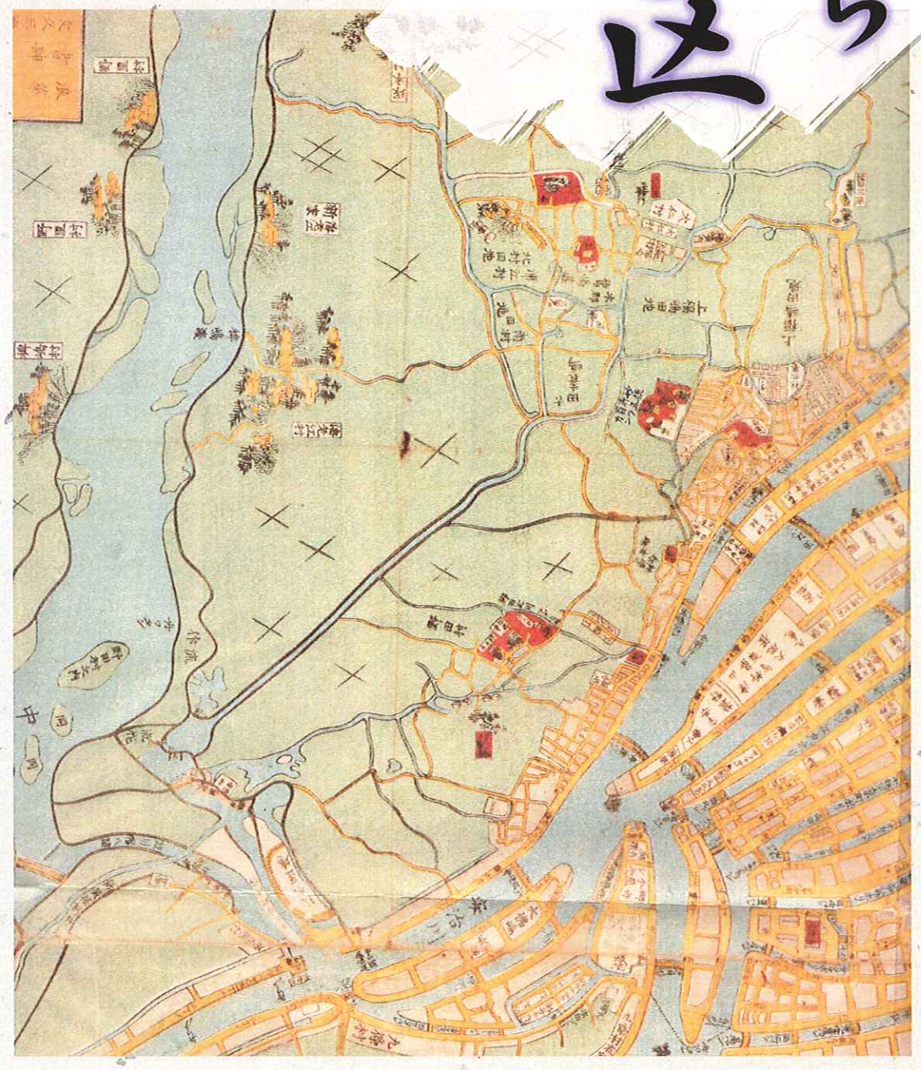
わがまち福島区



大阪控訴院から梅田方面を、明治35（1902）年に撮影したものです。
この辺りから福島区にかけての堂島・中之島には江戸時代には蔵屋敷が並んでいましたが、
明治以降、跡地は控訴院や病院などの公的施設に取って代わられました。
写真右上の高い建物は明治21（1888）年開設の「北の九階」と呼ばれた凌雲閣で、観光名所でした。
このような風景が写真左手のほう、現在の福島区方面にも続いていました。

発　行／福島区未来わがまち会議
平成19年 3月

事務局／大阪市福島区役所 区民企画室
大阪市福島区吉野 3-17-23
TEL：06-6464-9908

目次

明治時代の小字地名入り地図二葉 ―― P2

各小学校・校区五景

上福島小学校区 ―― P3.4
福島小学校区 ―― P5.6
玉川小学校区 ―― P7.8
野田小学校区 ―― P9.10
吉野小学校区 ―― P11.12
大開小学校区 ―― P13.14
鷺洲小学校区 ―― P15.16
海老江東小学校区 ―― P17.18
海老江西小学校区 ―― P19.20

神社・祭礼

福島天満宮 ―― P21
野田恵美須神社 ―― P22
海老江八坂神社 ―― P23
浦江八坂神社 ―― P24

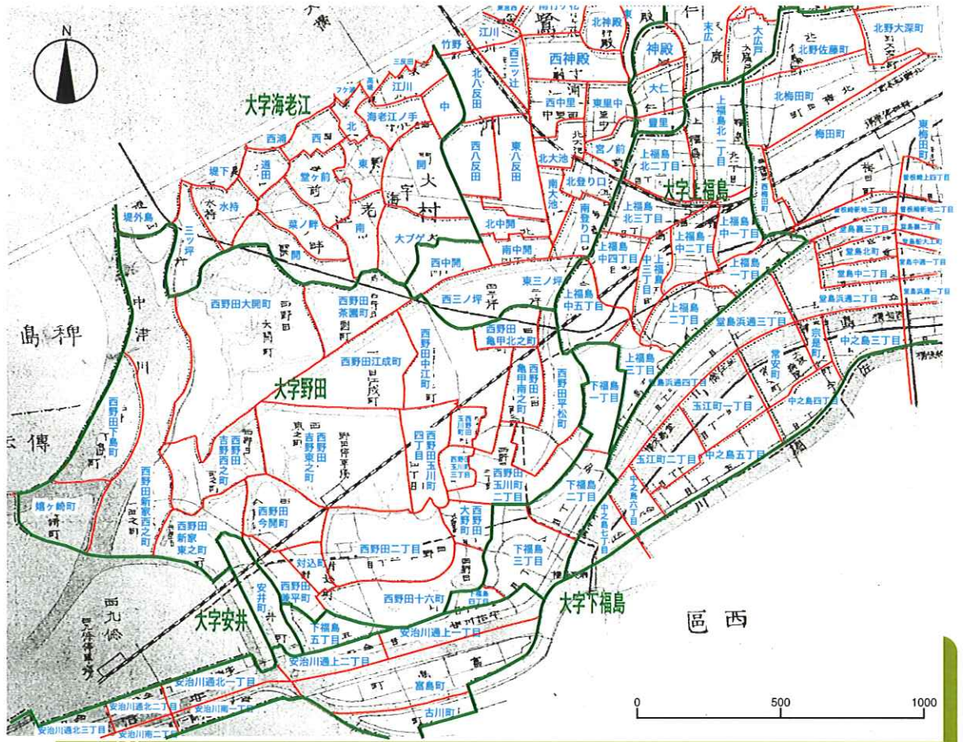
福島区の遺産

野田藤・福沢諭吉 ―― P25
地図でみる空襲被害から戦災復興 ―― P26

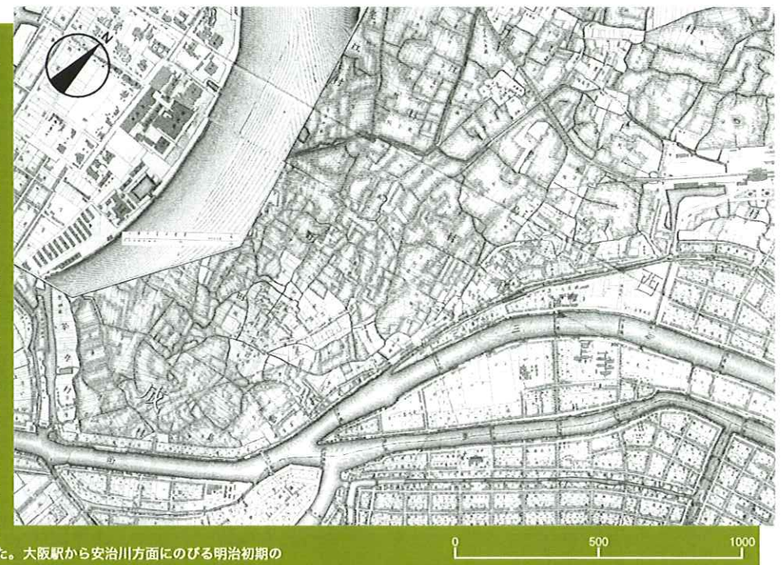
出典一覧

表　紙	改正増補国宝大阪全図　文久3(1863)年
2頁 地図／上	吉江集畫堂　明治41(1908)年「大阪地籍地図」
2頁 地図／下	内務省　明治21(1888)年　大阪実測図　五千分一
校区五景地図／上	明治18(1885)年仮製二万分一地形図「尼崎」図幅
校区五景地図／中	大正10(1921)年一万分一地形図「大阪西北部」図幅
校区五景地図／下	昭和17(1942)年大阪市撮影空中写真(大阪市計画調整局・大阪市立大学都市文化研究センター所蔵)
校区五景ベースマップ一万分一地形図	昭和61(1986)年「大阪福島」　国土地理院　承認番号*****
21～25頁 絵図	増修改正摂州大阪地図　天保15(1844)年再編　浪速書店　赤松九兵衛　発行
24頁 地図	明治42(1909)年測図　二万分一地形図「大阪西北部」図幅
25頁・裏表紙 写真	「上田貞治郎写真コレクション」　大阪市立大学都市研究プラザ
26頁 地図／上	昭和22(1947)年測図　二万五千分地形図「大阪西北部」図幅
26頁 地図／下	昭和28(1953)年測図　一万分一地形図「大阪首部」「大阪西部」

明治時代の小字地名入り地図二葉



明治41(1908)年に吉江集畫堂によって、当時の大阪市および接続町村の地籍図、土地台帳の本が出版されました。この地図は、大阪市の北西部を全体的に描いています。当時の小字名とその範囲を知るには便利な地図です。明治30(1897)年に大阪市に編入されたこの地図南部の地域では、新町名がつけられ、小字名は消えています。小字名は、農耕や山野の活動を反映した地名などもつけられています。いくつかの小字名は、新町名に引き継がれたことがわかります。
下図ともあわせて、地域の地理的、歴史的な背景を知ることができます。



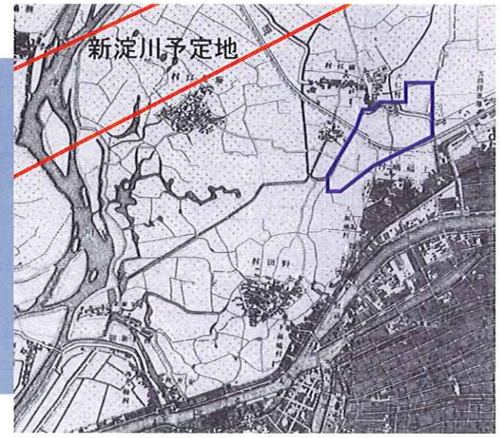
内務省地理局が作成した1万分の1の地図です。宅地や畑がみごとに描かれています。
特に小字名がはっきりと書かれ、上図では消えてしまっている、明治30(1897)年に大阪市に編入された南部地域の小字名が記載されています。
上福島、下福島村の小字名は、○○丁目表示が採用されたようですが、野田村は、京橋方面の東野田村と区別するために、西野田という地名を冠して、いくつかの小字名を町名に採用していることがわかります。
新町名は、昭和50(1975)年に住居表示の制度が導入されて、福島、玉川、野田、吉野、大開、海老江、鷺洲の町名にまとめられました。大阪駅から安治川方面にのびる明治初期の鉄道敷地がくっきり残っています。

上福島小学校区

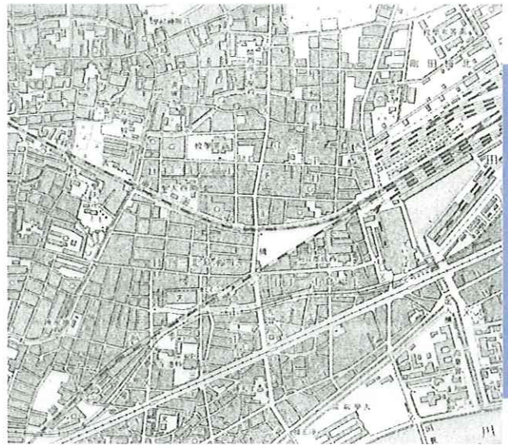
校歌

さきがけの　朝の光
めぐる窓　かがやくひとみ
はるばると　あゆみつぐ道
たくましく　心ゆたかに
上福島　ああ上福島

大阪府西成郡上福島村（1889）→大阪市北区（1897）→大阪市此花区（1926）→大阪市福島区（1943）



上福島村の水田地帯が広がっています。
中央を明治7(1874)年に開通の東海道線が横切ります。
北側には、難波橋を起点に、北野村に位置する梅田墓から延びる大和田街道(梅田街道)が北の境界となり、大仁村や聖天川を介して浦江村と接しています。

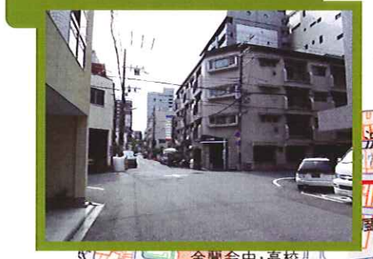


24頁の地図のように上福島校区は、明治末期には既に市街地化されていました。
大正時代には東海道線と西成線の間の空き地以外は密集市街地となっており、地図上からは当時の大阪市域と市域外の見分けは全くつきません。

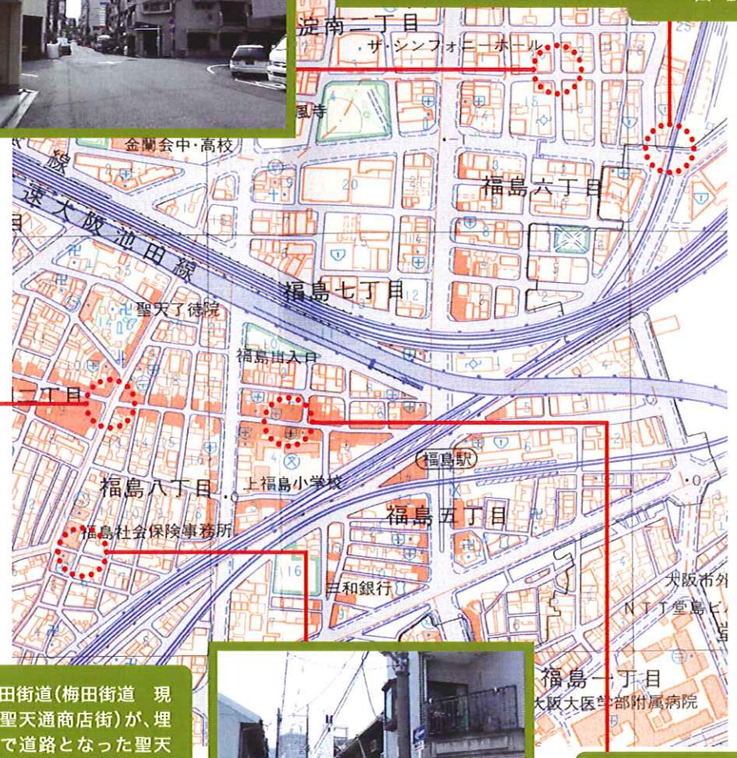
昭和11年に高架となった東海道線に校区は分断された形になっていますが。
戦後に拡幅されて現在のなにわ筋となった浄正橋筋の家並みも確認できます。

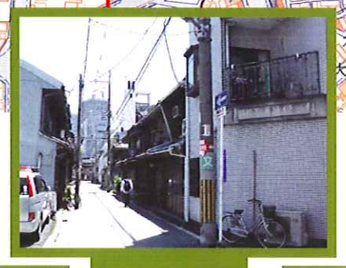
上福島校区　五景

梅田貨物駅が目の前にあります。遠くには阪急の建物も見え、この辺りにあった梅田という地名の由来と言われている梅田墓を想像するのは難しいです。



戦災復興土地区画整理で道幅が広げられ、かつての路地のある風景はなくなりました。
大正14(1925)年まではこの道路が大阪市の境となっていました。





校区の西方、福島8丁目付近には、現在も長屋が多く残っています。

大和田街道(梅田街道　現在の聖天通商店街)が、埋立てで道路となった聖天川をわたる地点に当たります。
この橋を渡ると(写真右方向へ)、かつては大阪市外の西成郡鷺洲村でした。

聖天通は明治末期からの「大和田街道(梅田街道)」で、国道2号線開通前は、大阪市内から尼崎方面へ至る主要な街道でした。

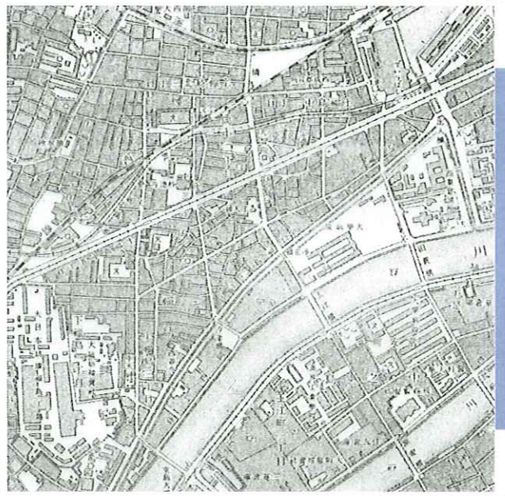
福島小学校区

校歌

六甲の峰 陽にはえて　淀の流れの 末はるか　難波津の みおつくし　しらべもゆかし 愛の鐘　今日も素直に伸びてよと　わがまなびやの 窓にひびくよ

大阪府西成郡下福島村・大阪市北区（1889）→大阪市北区（1897）→大阪市此花区（1926）→大阪市福島区（1943）

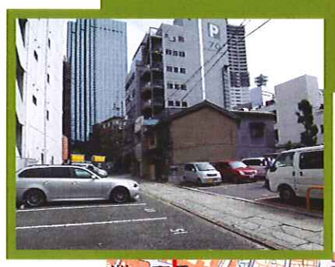
上福島村の集落、下福島村の集落の一部と水田地帯、そして堂島新地の市街地と蔵屋敷地帯、東は出入橋の架かる堀割の手前を境として、多様な地域を含んでいます。
福沢諭吉の生誕地、堂島の旧中津藩屋敷跡も含まれています。



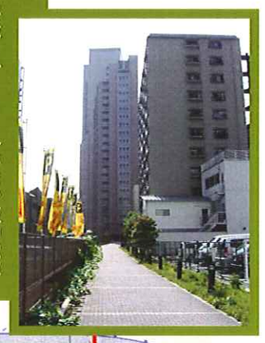
この地域は、24頁の明治42（1909）年の地図で描かれていますが、明治38(1905)年に阪神電車が開通した直後、明治42(1909)年の北の大火でほぼ全焼し、その後、大正元(1912)年に焼失地域の中央を、梅田新道から福島西通に向けて市電が開通しました。大火から10数年後、市街地は元の街路や路地を復元しながら復興しています。
大阪市に隣接する西成郡の郡役所も、当時は福島に立地していました。

昭和3（1928）年に、現在のあみだ池筋に延びる市電が開通し、道路が拡幅され、堂島大橋も架橋されました。
上の地図にある紡績工場は既に閉鎖され、現在の下福島公園となる空き地ができています。

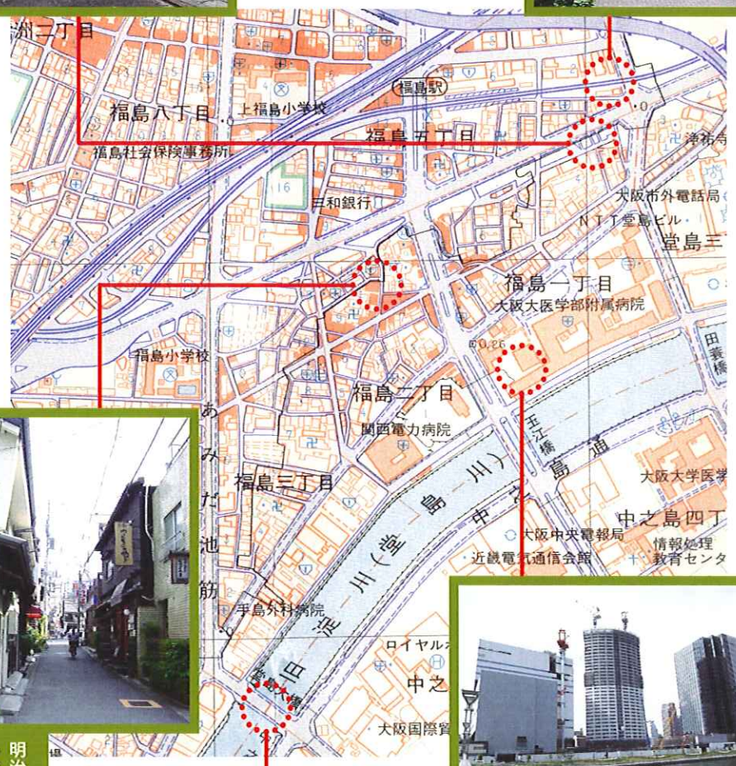
福島校区　五景

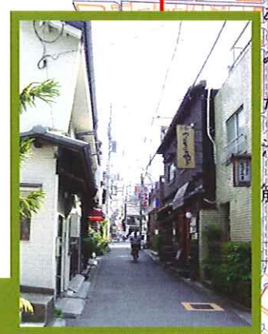


残念ながら建物は無くなっていますが、路地の石畳だけが残り、長屋街の面影、昔の生活空間をしのぶことができます。

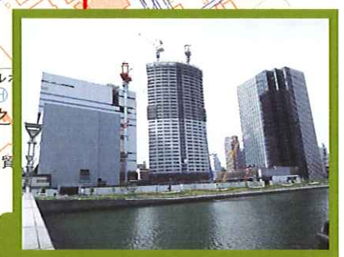


平成4（1992）年まで阪神電車が地上を走っていました。今のホテル阪神が旧福島駅で、遊歩道がちょうど線路の跡になります。





明治42（1909）年の北の大火で全焼しましたが、この辺りは江戸時代からの旧集落になります。銭湯などとともにおしゃれな雰囲気の店も並んでいます。



福沢諭吉の生誕地をのぞみます。藩屋敷の跡地は阪大病院となりましたが、それも移転し、さらに再開発が進んでいます。

両堂島川の両岸に藩屋敷、米蔵が並んでいました。
堂島大橋の欄干には、大阪大空襲で焦げた跡が残っています。

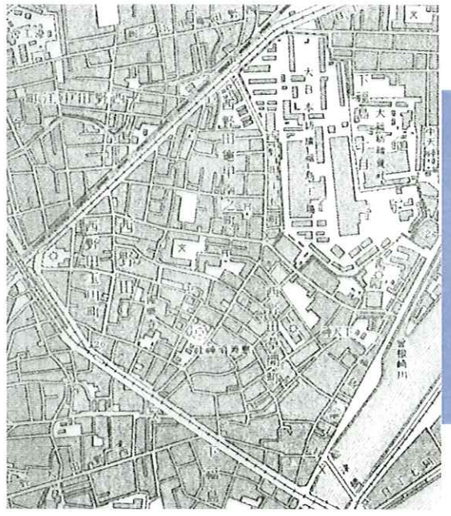
玉川小学校区

校歌

浪速の都　名にしおう　恵美須の神を　しずめにて　藤波かおる　下風に　代々の恵を　仰ぎ来し　われらがさとに　栄えあれ

大阪府西成郡下福島村・大阪市北区（1889）→大阪市北区（1897）→大阪市此花区（1926）→大阪市福島区（1943）

野田村の旧集落と下福島村の旧集落、およびその中間には野田村の水田地帯が広がっていました。
二つの村の間には野田の玉川が、そして下福島村と堂島川の間には、蜆川（曽根崎川）が曽根崎方面から流れていました。



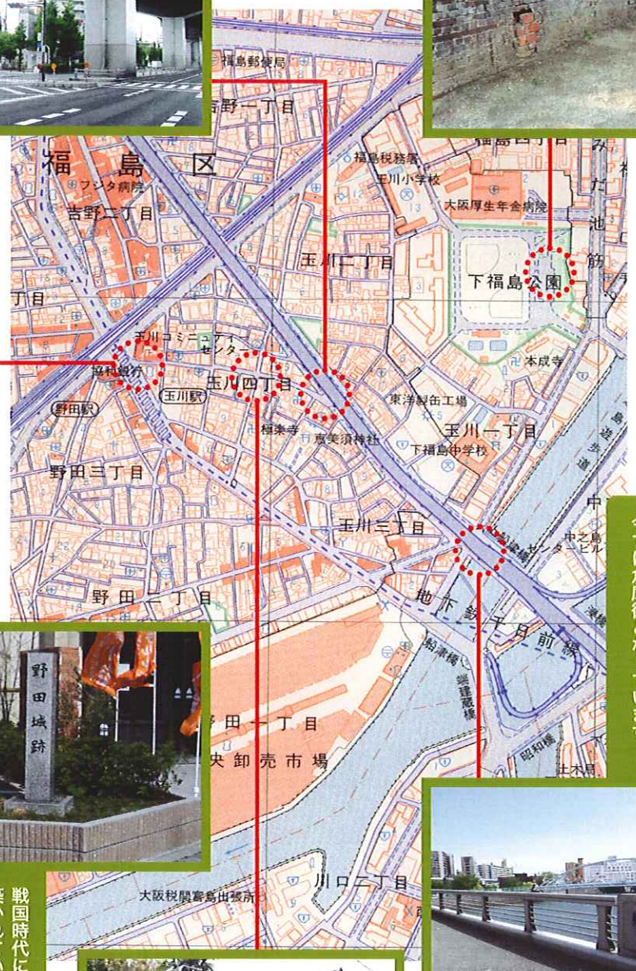
明治25（1892）年に福島紡績所が、明治27（1894）年には日本紡績所が相次いで建設され、24頁の地図でわかるように、明治期には市街地化が一気に進みました。大正5（1916）年に福島西通から西野田兼平町方面に向けて市電が開通しています。

大日本紡績福島工場は、戦時統制のなか、隣接工場とともに昭和17（1942）年までに廃止され、空き地となっています。
中央卸売市場とともに建設された八間道路が、安治川に架かる上船津橋につながっています。

玉川校区　五景

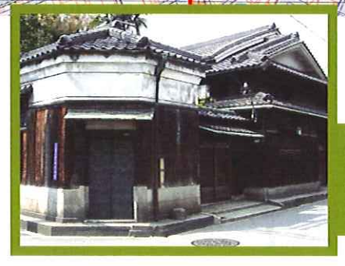
昔からの長屋の街並みを大きく分断する形で、阪神高速道路と新なにわ筋が建設され、昭和56（1981）年に開通しました。

24頁の明治42（1909）年で描かれた北の大火は、かつての紡績工場のレンガ塀で延焼が食い止められたと言われています。



上船津橋から安治川方面、旧川口居留地を望みます。今では倉庫街となっています。

戦国時代にはこの辺りに野田城が築かれていました。石碑の場所は移動しています。2頁の小字地図で、「城之内」という地名も見られます。



江戸時代の野田村の集落にあたり、歴史を感じさせる、大きな旧家が残っています。

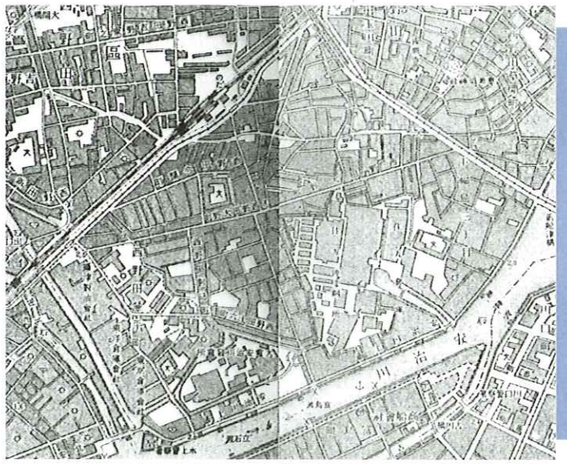
野田小学校区

校歌

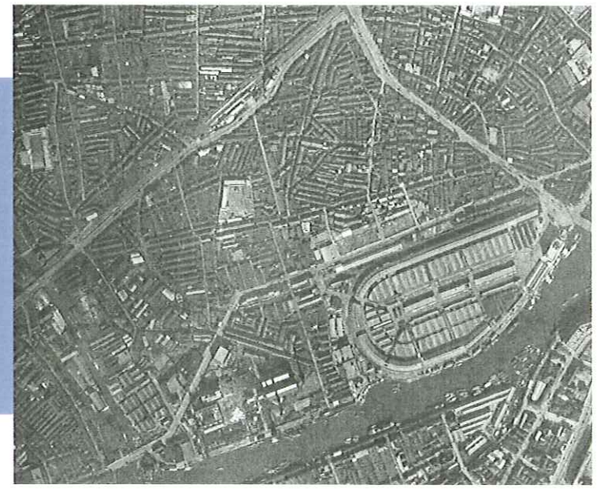
流れも清い玉川の　水面にうつる藤の花
紫匂う野田の里　古いゆかりのあるところ
われらはここに手をつなぎ　清く明るく育つのだ　育つのだ

大阪府西成郡野田村、下福島村大字下福島・大字安井（1889）→大阪市北区（1897）→大阪市此花区（1926）→大阪市福島区（1943）

野田村の本村の西南の半分を占め、下福島村や、安治川沿いの旧大坂三郷であった安治川通上の各町で校区が構成されています。
その他の大部分は水田であったことがわかります。



明治22（1889）年の摂津製油、明治30（1897）年の住友伸銅所の創業が核となり、翌年には西成線野田駅が開設され、24頁の地図でわかるように明治期に一気に市街地化が進みました。
大正5（1916）年に市電が玉川から西野田兼平町に向けて、大正7（1918）年には野田阪神前方面に相次いで開通し、玉川4丁目の市電の立体交差が出現しました。
大正時代の半ばまでにこの辺り一帯は、既に成熟した市街地となっていました。

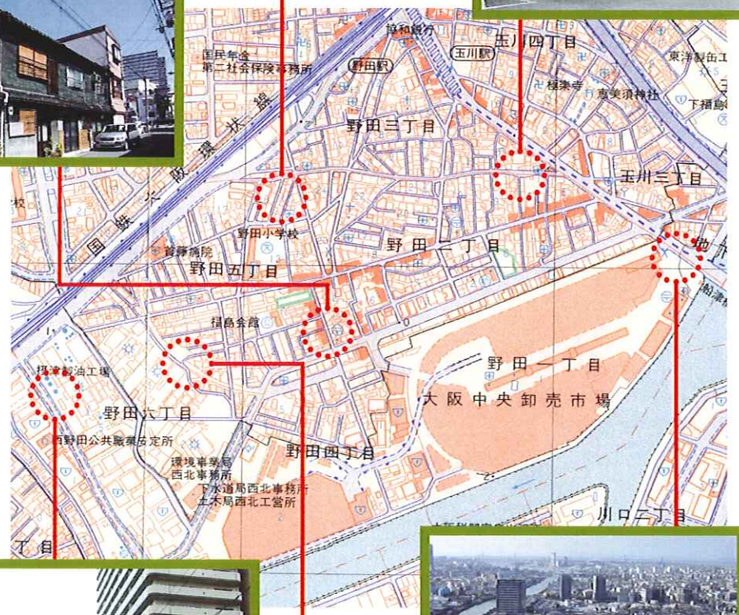


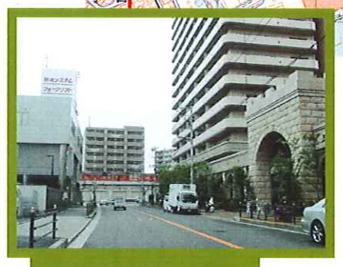
此花区桜島に移転した伸銅所の跡地に、大正14（1925）年に建設が決定され、昭和6（1931）年に完工した中央卸売市場が威容を誇っています。
市場の北を走る八間道路が新たに建設され、既成市街地を買いています。
安治川には多くの荷物運搬船が停泊しているのが写真から確認できます。

野田校区　五景

長屋の間の狭い路地に石畳が敷かれているところもあります。この石畳は工事で現在は原形を留めていません。

ところどころに蔵の残る旧家もあります。この辺りは旧野田村の中心でした。





かつての木場川が埋め立てで道路となり、明治時代からある工場地帯がマンション街へとすっかり変貌しました。

広大な敷地を占める中央卸売市場。安治川沿いは、かつては大坂三郷とされて町家が並んでいました。

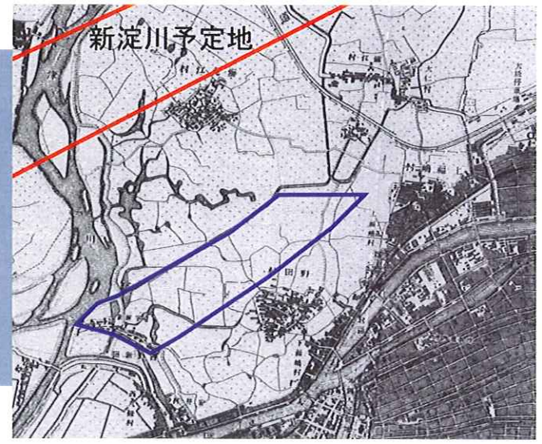
環状線野田駅からの引込線は中央卸売市場へ延び、ここを通って全国からの鮮魚・青果などが、市場へと運ばれて行きました。

吉野小学校区

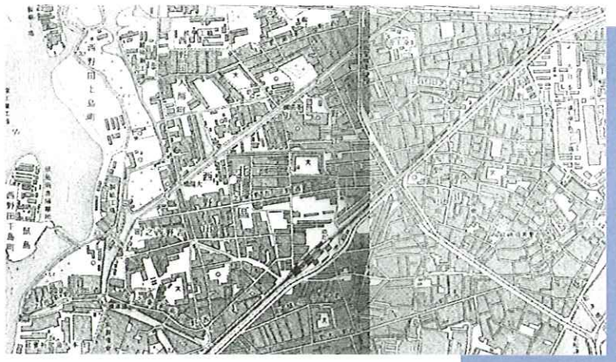
大阪府西成郡野田村（1889）→大阪市北区（1897）→大阪市此花区（1926）→大阪市福島区（1943）

校歌

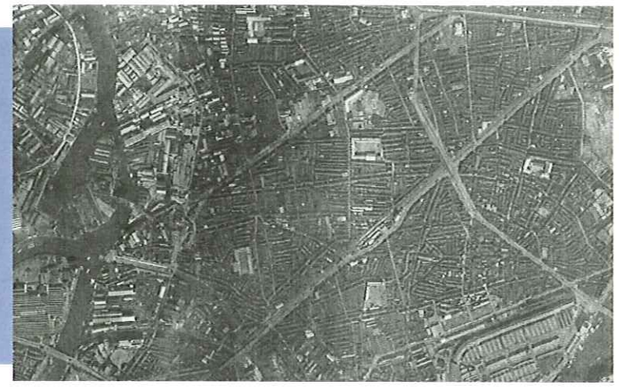
歴史は古き　難波津の　西に輝く　理想郷　愛の光に　包まれて　正しく強く　育ち行く　明るい学び舎　吉野小学校



野田村の水田地帯が広がり、北は聖天川、南は明治31（1898）年に開通する西成線で区切られた、のどかな田園であったことがわかります。
中津川沿いの自然堤防上には、野田新家という集落があり、今も連合町会名として残っています。



明治30（1897）年の住友伸銅所創業、翌年の西成線の開通、その後、大正7（1918）年に玉川4丁目から野田阪神前まで市電が開通しました。
24頁の地図と比較してみると、大正時代初期の10年ほどで完全に市街地化したことがわかります。
地図には現れない多くの小工場がこの市街地の中にありました。

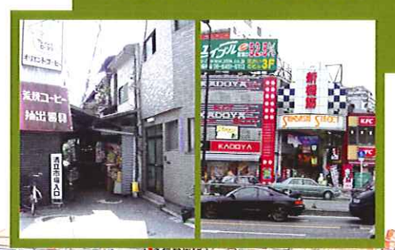


細長い市街地は、立錐の余地が無いほどの長屋で埋め尽くされている状況が見て取れます。
校区の北の境界であった聖天川も既に埋められて道路（現在の北港通）になっています。

吉野校区　五景

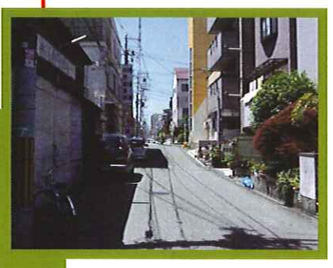
写真手前は戦災復興地域であり、奥に見える狭い街路の道幅が区画整理で広げられたことがわかります。

新橋筋はアーケードのある大きな商店街です。
中には昔ながらの市場もあります。



西野田抽水所は此花区との境界線上にあり、街区表示板が2枚並んでいます。
かつてはここに木場川が流れていました。地盤が低い土地では洪水対策で抽水所が不可欠です。

この辺りの長屋の1階には作業場があり、現在でもメリヤスなどの軽工業を営まれている方が多いようです。



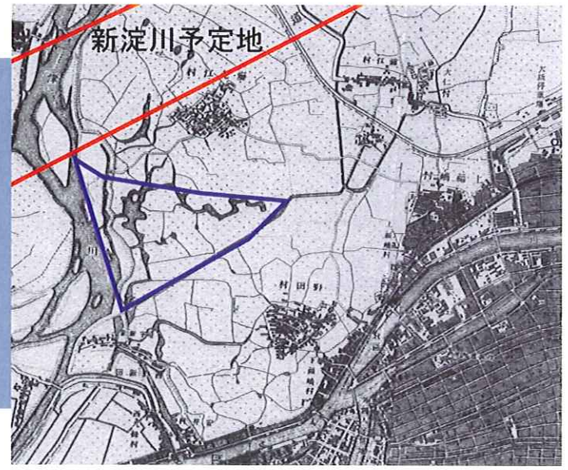
小さな交差点に少し起伏が見られますが、写真の左側は、かつて西成線と呼ばれて、昭和30年代まで地上を走っていた現在の環状線を横断する踏切となっていました。
元々は水田地帯だったので、そこに盛土をして線路を敷いた名残の起伏です。

大開小学校区

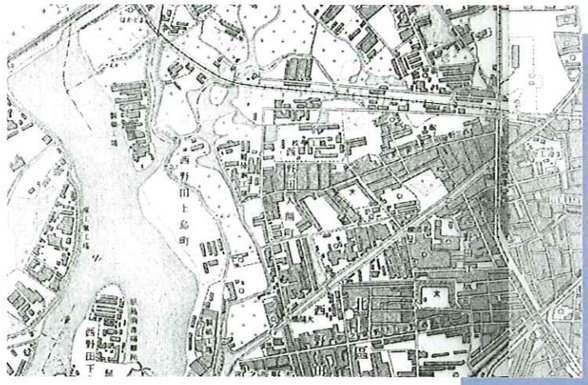
校歌

咲くやこの花　梅の花　朝風かおる　福島の　浪速のゆかり　身にうけて　われらは育つ　大開　末広がりの　大開

大阪府西成郡野田村（1889）→大阪市北区（1897）→大阪市此花区（1926）→大阪市福島区（1943）



ほぼ全域が野田村の田地でした。聖天川が南の境にとなり、人家の全くない、小河川が曲流する田園地帯であったことがわかります。
中津川が村域の西の境界となり、その南西にあった島は、鼠（ねずみ）島と呼ばれていました。

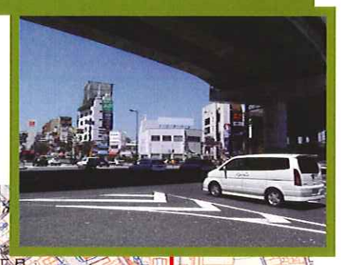


明治30（1897）年に大阪市に合併され、西野田という名前が各町名に被せられました。明治38（1905）年の阪神電車の開通や明治42（1909）年に開校した職工学校を核にして、その後は工場も含みながら著しく市街地化が進み、市電も開通して交通至便な地となりました。
西側の中津川方面は工場街に変貌しつつあります。

完全に市街地化し、長屋に埋め尽くされている状況が見て取れます。聖天川は埋め立てられ、中津川沿いは大工場が林立しています。

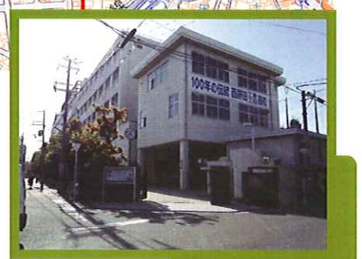
大開校区五景

大開公園に松下幸之助氏の碑が建てられています。松下電器は大正7（1918）年に、この大開で創業されました。



野田阪神交差点から大開方面を望む。
道幅が広い北港通は、かつての聖天川を埋め立ててできました。
写真右手には大開校区を貫く商店街があります。

広い川幅を持った中津川の流路跡から、旧鼠島にある高層住宅方面を遠望しています。



西野田工科高校は明治時代に設立の伝統校です。戦前は「職工学校」と呼ばれていました。たくさんの技術者や職人を育成し、大阪の工業発展に大きな功績を残してきました。

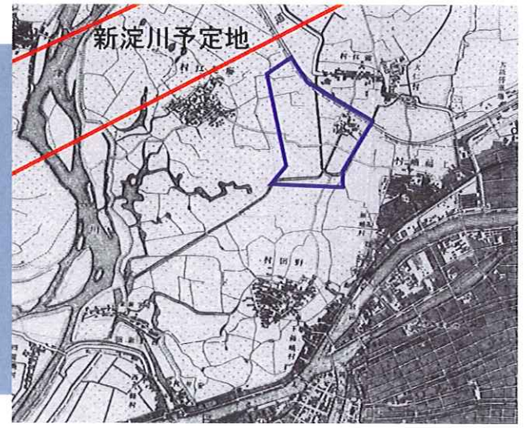
写真手前は戦災復興地域であり、奥に見える狭い街路の道幅が、区画整理で広げられたことがわかります。

鷺洲小学校区

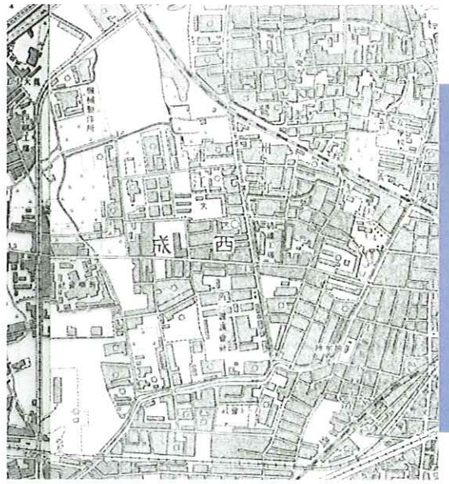
校歌

淀のながれを　くみわけて　水の通い路　いとしげく　煙は高く　空をおいて　鷺洲の里は　にぎわえり

大阪府西成郡鷺洲村大字浦江（1889）→西成郡鷺洲町（1911）→大阪市西淀川区（1925）→大阪市福島区（1943）



浦江村の本村の南に当たり、浦江聖天と、聖天川の流れが水田地帯を走る、のどかな田園地帯であったことがわかります。
明治7(1884)年に東海道線が、この浦江村を横切る形で敷かれました。



明治時代の水田地帯は、打って変わって住宅や工場の密集する市街地に変貌しています。
西成郡という地名が目立ちますが、浦江村は海老江村、大仁村、塚本村とまとまって新たにできた鷺洲村となり、後に鷺洲町に名前を変えました。
聖天川をはさんで市の境界が走っていますが、大阪市街とは全く見分けが付きません。

完全に市街地化され、長屋や工場が目に付きます。聖天川は埋め立てられています。
浦江村の本村は、この写真の撮られる翌年に大淀区（現在は北区）となり、かつての浦江村は行政区が分割されてしまいました。

鷺洲校区　五景

東海道線の橋脚には、昭和20（1945）年6月の空襲で米軍攻撃機による機銃掃射の弾痕が残っています。

「浦江聖天」は庶民信仰の場として親しまれています。
山門は大阪府の文化財にも指定される重要なもので、松尾芭蕉のカキツバタの句碑も残っています。

この道路はかつての聖天川の流路を利用しており、大正14（1925）年までは大阪市の境界線となっていました。

かつてのゴム工場敷地がそのまま団地に変貌しています。
奥ではタワーマンションも建設中です。

この辺りに残る昔ながらの長屋は、防火壁「うだつ」が付いています。

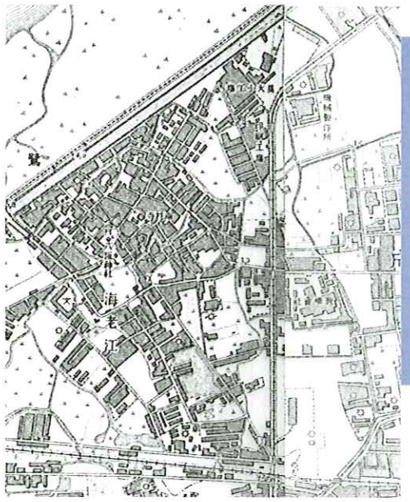
海老江東小学校区

校歌

浪速の春を　つげてきた　淀の流れを　身にくんで　海老江の里に　学び舎の　ほこりを胸に　たたえよう

大阪府西成郡鷺洲村大字海老江（１８８９）→西成郡鷺洲町（１９１１）→大阪市西淀川区（１９２５）→大阪市福島区（１９４３）

海老江村の本村部分の大部分と、その北東側を占める水田地帯が校区となっています。
明治7(1874)年開通の東海道線と、明治43(1910)年に完工した新淀川開削工事によって、北部の田地が河道に変貌する直前の状況がわかります。

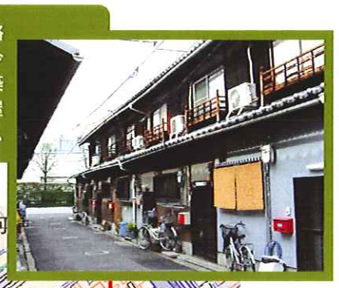


鷺洲村となった海老江本村の周りに、大規模な工場や住宅が続々と建ち始め、大正3(1914)年には阪神野田駅から路面電車の北大阪線が走り始めました。
その沿線や新淀川と併走する長柄(中津)運河沿いには、数多くの工場が進出していることがわかります。

大正期には見られた水田がまったく姿を消し、市街地化、工場化が著しく進んでいます。

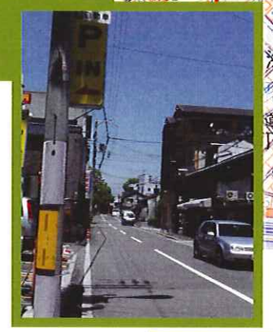
海老江東校区　五景

新淀川開削により、海老江の旧集落の北側がカットされた状況がよくわかります。
堤防に並行して長柄(中津)運河も建設され、当時の工場立地がより促進されました。



大きな道から路地を入ると、今なお、ほぼ建築当時の姿で長屋が残っています。

野田阪神から八坂神社まで伸びる直線道は、国道2号線が出来る以前の主要道路でした。
車が無ければ今でも野田阪神から神社の鳥居を見ることができます。



阪神野田駅から、神戸方面、天六方面に路面電車が走っていました。
現在のジャスコと阪神電鉄本社は、その車庫跡を利用して建てられました。

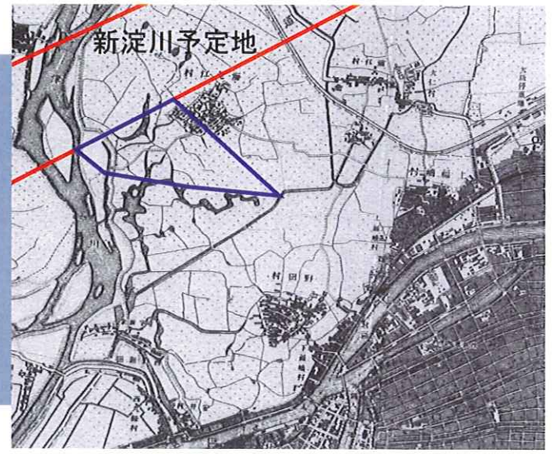
海老江の旧集落では、旧家が今なおいくつか見られます。

海老江西小学校区

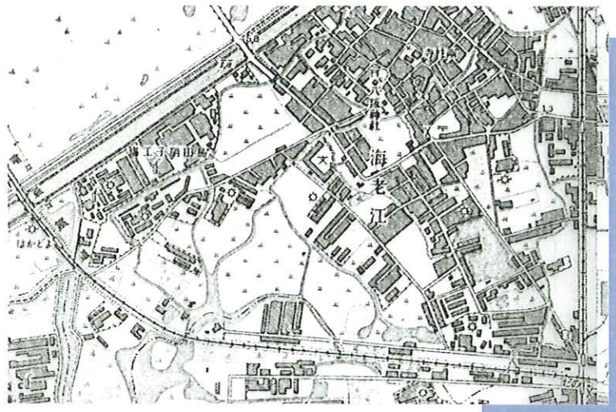
校歌

淀の川水　すえとおく　流るるさまを　ながめつ　明るく清く　伸びやかに　我等は学ぶ　海老江西　そびえて高き　まなびやよ

大阪府西成郡鷺洲村大字海老江（１８８９）→西成郡鷺洲町（１９１１）→大阪市西淀川区（１９２５）→大阪市福島区（１９４３）



海老江村の本村の一部を含み、あとの大部分は水田であったことがわかります。
また中津川の分流となる小河流も見られました。
明治43(1910)年に完工した新淀川開削工事によって、広大な水田地帯が消滅する直前の状況です。

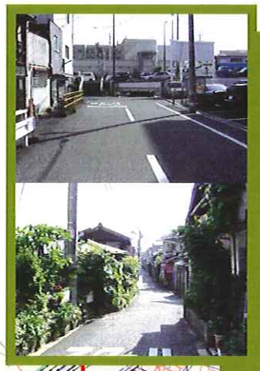


鷺洲村の一部となった海老江では、新淀川と並行する長柄(中津)運河沿いに大工場が、また水田地帯にもいくつかの工場が進出してきています。
急激な市街地化がまさに起ころうとしている頃の様子です。
阪神電車は明治38(1905)年に開通しますが、大阪市との境界線は、その線路を何度もまたいで曲流する川とされました。

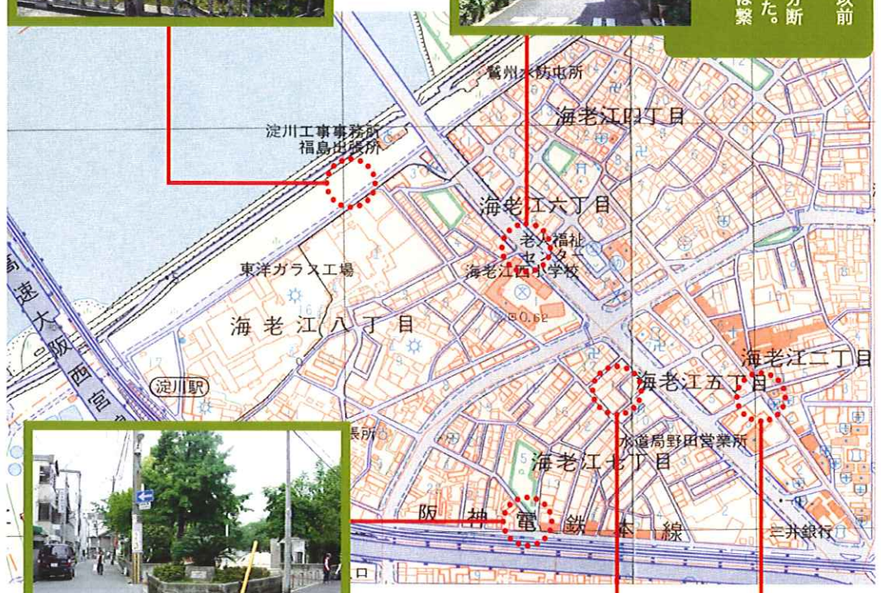
完全に市街地化が進み、長屋で埋め尽くされました。
大正15(1926)年に完成した阪神国道と路面電車の国道線が、既成市街地を切り開いて走っている状況がわかります。

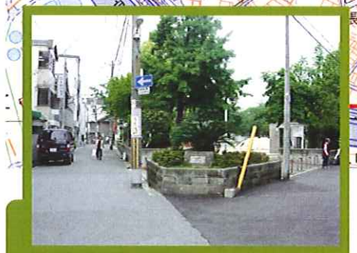
海老江西校区　五景

長柄(中津)運河跡沿いには、最近まで大工場がありましたが、今は撤去されて無くなっています。

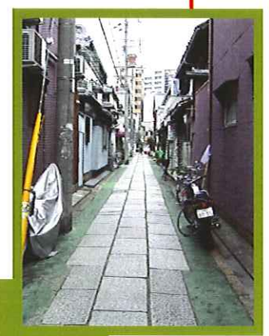


大阪と神戸を結ぶ国道2号線は、以前は阪神国道と呼ばれていました。
この阪神国道の建設で旧集落が分断されたため、地下通路が造られました。通路を抜けて階段を上がると昔は繋がっていた路地に出ます。





左側に伸びる道はかつては川で、大阪市と西成郡の境界ともなっていました。



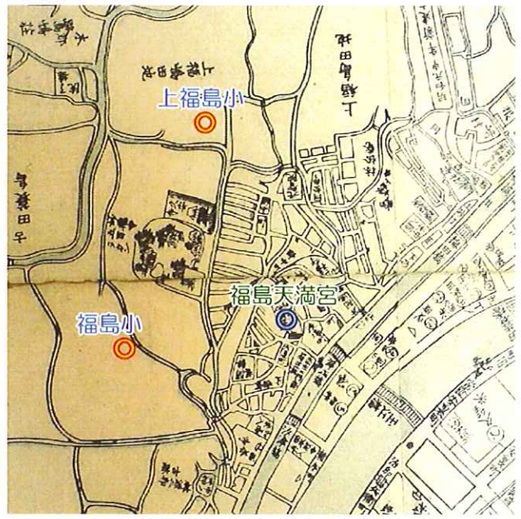
石畳が残る路地。
石畳保存会もあるそうです。

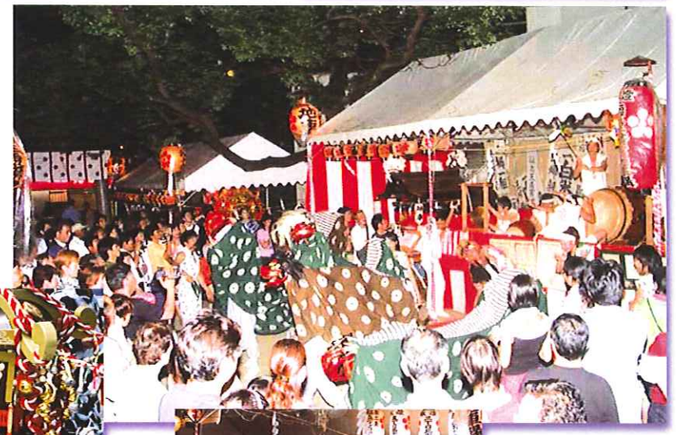
野田阪神から八坂神社に伸びる道路を境に、海老江東西の校区が分かれます。写真左側は戦災復興地域、右側はかつての面影を残した路地で、奥には市場もあります。

神社・祭礼

福島天満宮

かつて福島には、上の天神、中の天神、下の天神の3天神社がありました。
福島天満宮は上の天神に当たります。
主な祭事として、6月30日の夏越大祓『茅の輪くぐり』、7月24・25日の夏祭『天神祭』があります。
祭りの地車囃子は、歌舞伎「夏祭浪花鑑」で演奏され、平成16（2004）年には米国ニューヨーク・リンカーンセンターでの「平成中村座」公演にも参加しました。

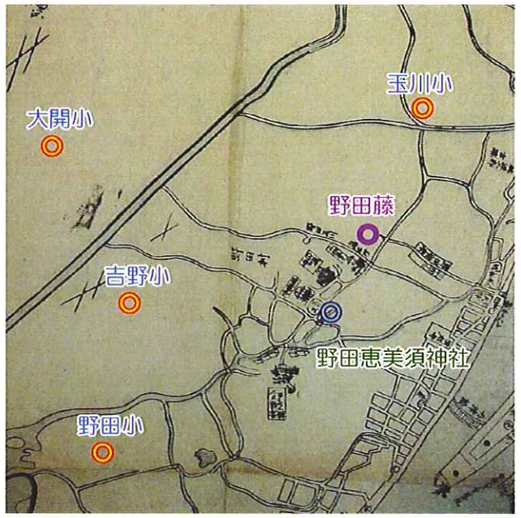


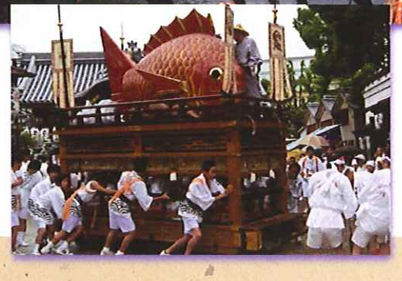


神社・祭礼

野田恵美須神社

創建年は不明も、社内の建石には「永久三乙未年三月」（1115年）との記録があります。
淀川の堆積作用で大阪平野が造られるなか、最初にこの地を開発した漁民が信仰する、釣竿を持ち大鯛を抱える恵美須大神を祀ったと思われます。
主な祭事は、1月9～11日の十日戎、7月19・20日の夏祭です。
夏祭では地車、鯛鉾、太鼓が巡行します。
昔は生国魂、天満、御霊、茨住吉と並ぶ、勇壮な太鼓とされていました。





神社・祭礼

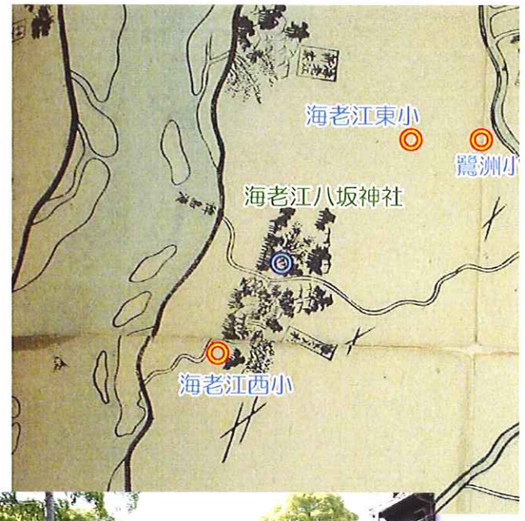
海老江八坂神社

境内には1100年代前半の年号が刻まれた灯籠があり、1383年再建という記録からも古社であることが判ります。戦国時代に織田信長が戦勝祈念に奉納したという太刀も残っています。

主な祭事は7月17・18日の夏祭と、12月15日の「オキョウ(饗)」神事です。

夏祭では枕太鼓や地車を曳航し、宮入では海老江独自の地車担ぎ上げがあります。

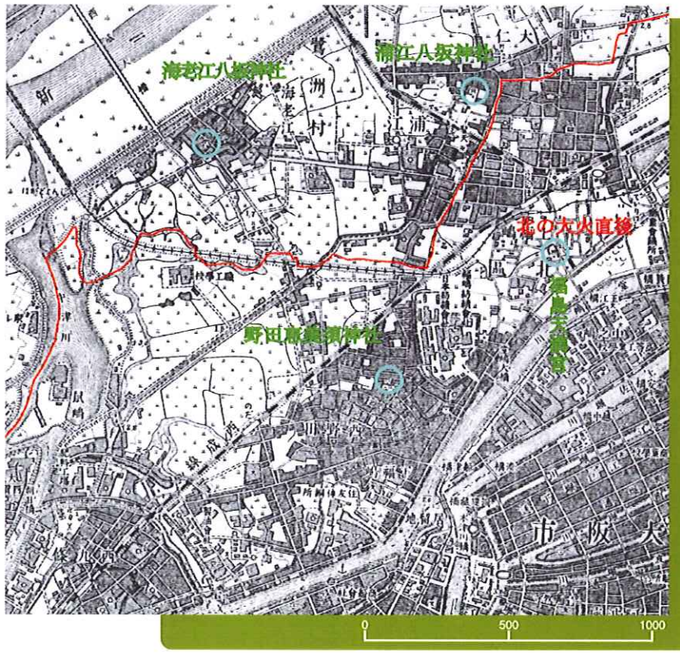
また、オキョウ(饗)神事は大阪府無形文化財に指定されています。



神社・祭礼

浦江八坂神社

（素戔嗚尊神社）

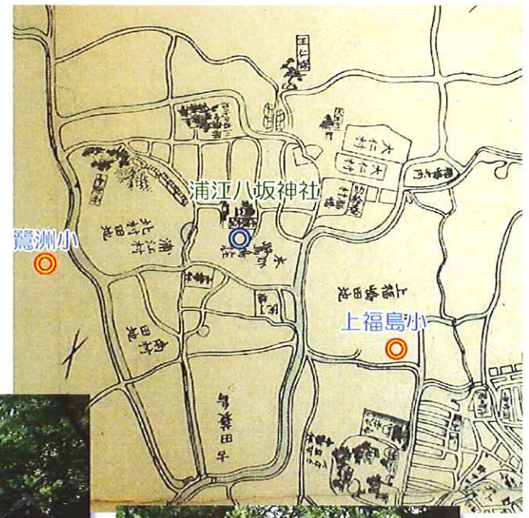


明治42(1909)年の福島区近辺の地図です。阪神電車が開通し、急速に工場地域化、市街地化が進み始めた様相が、また同年に起こった北の大火の被災地もはっきりとうかがえます。図中の赤線は、明治30(1897)年から大正14(1925)年までの大阪市の境界線を示しています。

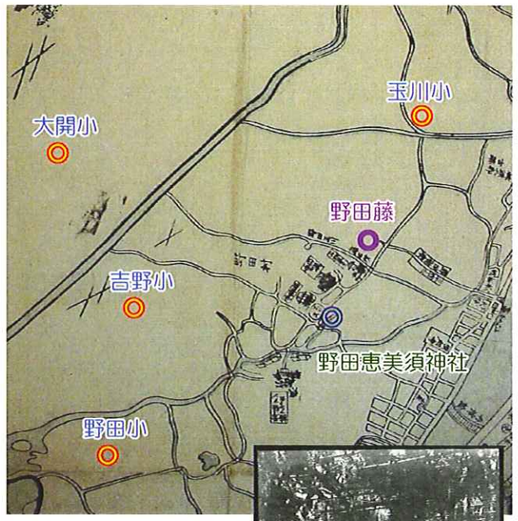
行政区の再編で、浦江村が大淀地域(北区)と鷺洲(福島区)に分断されてしまいました。しかし今なお、鷺洲地域の氏神は浦江村の当時のまま、浦江八坂神社となっています。

主な祭事は、7月の夏祭や10月17・18日の例大祭です。

夏祭りでは町会ごとに子供みこしを出して、お年寄りから幼児までが町内を練り歩きます。

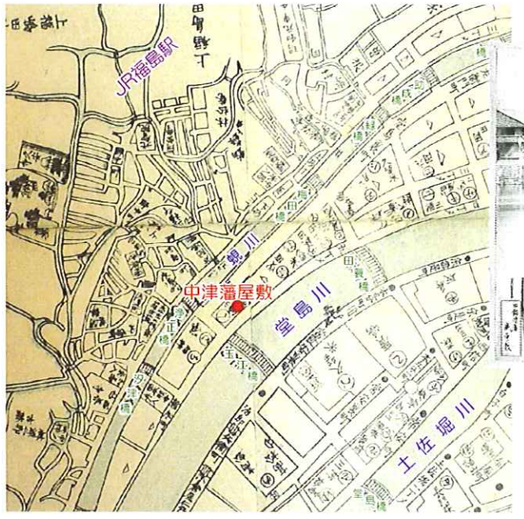


野田藤



古来よりこの付近には藤が群生していました。野田藤の名の由来は、明治になって植物学者・牧野富太郎博士により「ノダフジ」と命名されたことによります。
一般のヤマフジは「つる」が左巻きなのに対し、「ノダフジ」は右巻きなのが特徴です。貞治3(1364)年、室町幕府の2代将軍足利義詮が藤の花見に訪れて、「いにしへのゆかりを今も紫の　ふじなみかかる野田の玉川」と詠んでいます。
また文禄3(1594)年には太閤秀吉も、千利休・曽呂利新左衛門を供にして藤の花見に訪れ、ここで茶会を開いたと言われています。
江戸時代には一時期、野田藤も衰退しましたが、その後、再び"吉野の桜""高雄の紅葉"と並び称されるほどの藤の名所となったようです。
明治以後、野田藤は衰え、一時はほとんど絶滅したような状態でしたが、大阪福島ライオンズクラブが中心になって藤の再生運動を行い、昭和46(1971)年に、藤家に残っていた古木に接ぎ木を行い成功しました。
今では区内各所で春には野田藤を見ることができるようになり、「区の花」にも指定されています。
左の古写真は明治期の野田藤の様子です。

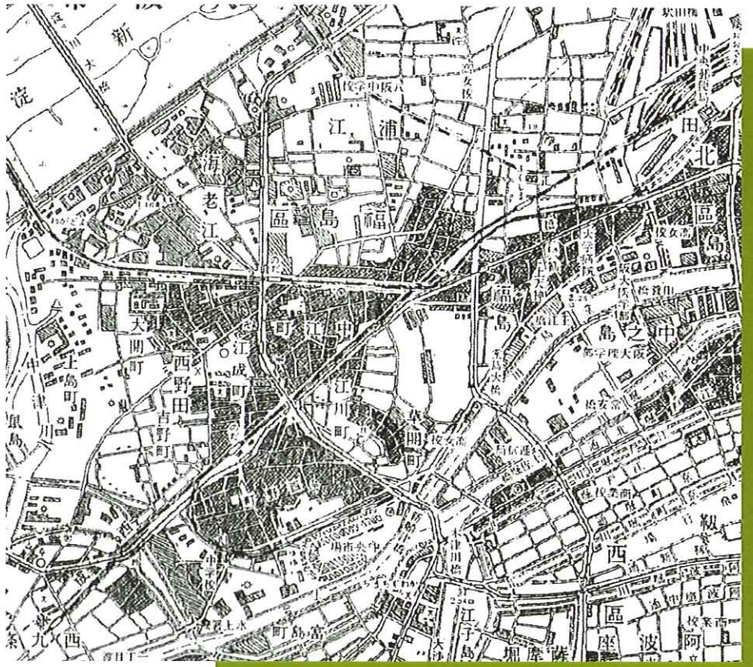
福沢諭吉



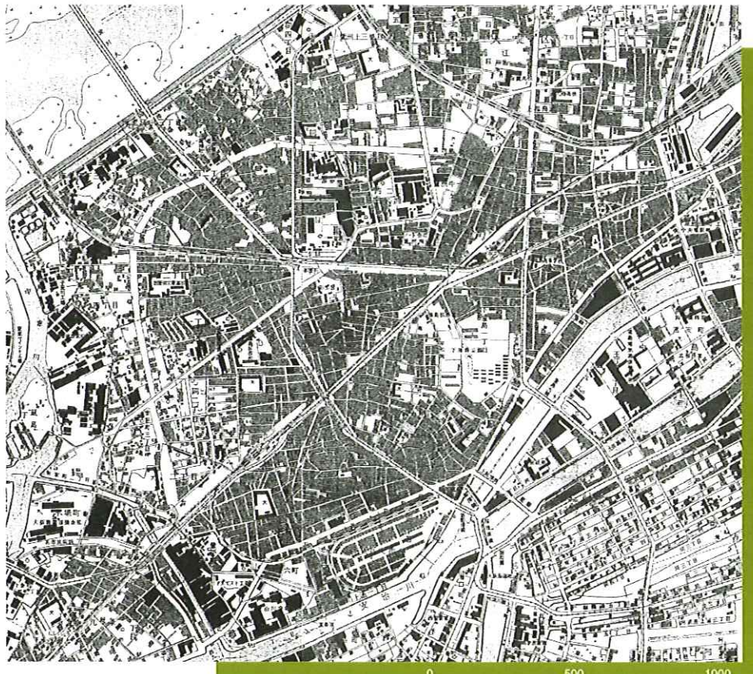
「天は人ノ上ニ人ヲツクラズ、人ノ下ニ人ヲツクラズ」の言葉で知られる福沢諭吉は、天保5(1835)年、豊前中津藩士福沢百助の兄1人、姉3人の5番目の末子として、同藩大坂蔵屋敷(旧阪大病院跡)で生まれました。
天保7(1837)年6月、福沢諭吉が1歳6か月の時に父百助を亡くし、母と兄姉4人とともに郷里中津に帰郷しました。

絵図上を歩いてみましょう。現在のJR福島駅の辺りから水田地帯を少し歩くと、上福島村の集落に入ります。お寺などを見ながら蜆川(曾根崎川)まで出ます。ここに架かる浄正橋を渡って、東に向かうと富山藩屋敷、その隣に中津藩屋敷となります。写真は明治初期に堂島川から見た鍋島藩屋敷です。現在の裁判所のところに建ち、このような蔵屋敷が中之島から堂島にかけて並んでいました。

地図でみる空襲被害から戦災復興



昭和22(1947)年に作成された、戦災を受けた直後の地図です。黒く描かれているところが、空襲による焼失を免れたところです。
3月14日の第一次大阪大空襲では都心部に近い堂島川沿いが被災し、その後、6月1日から数次にわたる大空襲で投下された爆弾・焼夷弾で大被害を受けました。こうした焼失箇所では、戦後の戦災復興事業による区画整理で街路が広げられ、昔ながらの路地が消失しました。



上図からわずか6年で、地図上で黒く描かれた市街地が大きく増えました。住宅が再建され、市街地化が再び進み始めた戦後の復興状況が見て取れます。
地図の北西部を環状に走る海老江九条線は、戦時中の建物疎開の跡で、いち早く建設された道幅の広い幹線道路として目立っています。
戦災復興土地区画整理は、大開と吉野西部の「西野田南部工区」で始まっています。